

氏名	朴龍徳 (PIAO LONGDE)		
学位	博士 (日本語文化学)		
学位記番号	甲第126号		
学位授与年月日	平成27年3月20日		
審査研究科	外国語学研究科		
論文題目	現代日本語における始動アスペクトを表す複合動詞の意味と機能 — 認知意味論的アプローチによる考察 —		
論文審査委員	(主査) 大東文化大学准教授	福盛貴弘	
	(副査) 大東文化大学教授	田中 寛	
	(副査) 大東文化大学教授	大月 実	
	(副査) 神戸大学教授	定延利之	(外部副査)

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 研究の内容、目的

本研究では認知意味論の枠組みで、「始動」を表す「～出す」「～かかる・かける」「～てくる」を共時的な意味拡張のメカニズム、及びその動機づけを分析することにより意味の本質を考察すること、さらに「～始める」との比較を通して、その意味的相違点を明らかにすることを目的とした。

Bolinger(1977)は「一つの語には一つの全体を包括するような意味がある」とし、意味と形は一対一の対応を成していると述べている。つまり、形が違えば意味にも違いがあり、意味が違えば形にも違いがあるという。これは認知言語学のテーゼとなる基本概念でもあり、その後、多義語の統一的説明に有効な様々な理論が打ち出されている。従来の研究では「～始める」「～出す」「～かける」「～てくる」が表すアスペクトの意味について、母語話者の直感や類義表現の比較の立場からそれぞれの意味特徴を記述したことに留まっている限界があった。つまり、「～出す」「～かける」「～てくる」が表すアスペクトの意味は当然あるものとして、その意味記述をしてきたことが多く、なぜそのような違いが出るか

については十分な解析、説明が行われていない。たとえば、「始める」は本動詞自体が語彙的なアスペクト的意味を有していることから複合動詞の後項動詞としての「～始める」の意味は本動詞から直接受け継がれていると考えられる。これに対し、「～出す」「～かける」「～てくる」などは本動詞が語彙的にアスペクト的意味を含んでいるわけではなく、本動詞から直接受け継がれているとはいいがたい。したがって、本動詞が複合動詞の後項動詞として使われる場合、なぜアスペクト的意味を表すようになったかが問題になる。「～出す」「～かかる・かける」「～てくる」は本動詞が文法化の過程で意味変化を遂げることによって生じた意味であるが、認知言語学では多義語が複数の意味で用いられる場合、その複数の意味は共通のスキーマをもとに互いに関連付けられていると考える。本研究の主眼は分析法として認知言語学のイメージ・スキーマ理論を通して、抽象化された「～出す」「～かかる・かける」「～てくる」などにおける動機付けを探り、意味と形式の統合をはかるものである。

3. 論文の構成、内容

朴龍徳氏の論文は序章、終章をふくめ全8章からなり、全268頁にわたる労作である。以下、各章の概要を述べる。第1章では、研究の背景、研究の方法と目的、研究の対象と言語資料、そして本研究の構成について述べた。第2章では、本研究の理論的枠組みとなっている認知意味論の考え方と本研究で援用するイメージ・スキーマ、メタファー、意味拡張などの諸概念を確認した。第3章では、アスペクト的意味を表す複合動詞における研究の流れを概観し、本研究が目指す方向を示した。第4章では、認知意味論のベースとプロファイルの考え方を援用して、「～始める」は出来事の内部過程を前提に存在し、そこから始まりの段階を取り立てることを論じた。第5章では、まず、本動詞「出す」のイメージ・スキーマを設定し、本動詞の意味と関連付けて「～出す」における意味拡張のメカニズムを論じた。つまり、本動詞「出す」は「外部への移動」を表すが、これには「容器のスキーマ」が関わっている。「容器のスキーマ」が背景化されると、「出現」の意味に拡張されるが、出現したものが「事態」として認識されると、ある事態の「発生」を表す。また、出現したものが事態に認識されると、その事態の始まりに焦点が当たるが、「～出す」が「始動」の意味になると主張した。

第6章では、「～かかる・かける」への意味拡張のメカニズムを論じた。本動詞「かかる・かける」は物の位置変化を表すものとして考えることができ、〈起点—経路—到達点〉スキーマ上〈到達点〉のところに焦点がある。また、「かかる・かける」はそれ独特の「交接触」という特徴があり、「かかる」は〈到達点〉に留まることを表し、「かける」は〈到達点〉に向かう行程を表す。

〈起点—経路—到達点〉の延長線の上で、移動中のものが「AがBにかかる」ことは「交接触」の特徴により、AがBに「阻害」され、Bを越えなかった意味を派生する。そして、この「阻害」の意味が抽象化されると、単に通過点を越えていない意味になる。アスペクトを表す「～かかる」は空間移動における〈経路〉の概念が時間の方に写像されることによって生じた意味であるが、「阻害」の意味に動機づけられ、変化の結果達成の限界を越えていない意味を表す。

アスペクトを表わす「～かける」も空間移動における〈経路〉の概念が時間の方に写像されることによって「変化の結果に向かう途中」を表す。但し、「～かける」は本動詞「かける」から直接拡張されたわけではなく、「交接触」の特徴により、「～かかる」から結果未達成の意味が入ってくることにより、結果未達成の意味を潜在的に表す。

第7章では、認知意味論の「主観性」の概念を援用して、本動詞「来る」の意味と関連付けて「～てくる」の意味拡張のメカニズム、及び「始動」の「～てくる」の動機付けを考察した。つまり、本動詞「来る」は直示動詞として移動の対象が話し手への接近を表し、話し手の領域への到着を含意している。そして、「来る」は話し手が常に参照点となり、概念化する事態に参加することになる。

「～てくる」が表す始動アスペクトは空間移動からの拡張として、メタファー的に移動するものが事態に認識され、ある事態変化の結果が話し手の知覚領域への到着というところに動機づけられている。そして、「～てくる」が表す始動アスペクトの意味は話し手が知覚できる変化の結果からの開始を表すこ

とになる。また、「～てくる」は主観性の高い表現として、話し手が心理的にある事態が自分に向けられていると捉えるニュアンスが強く、事態認知の臨場感がある。

第8章では、本研究のまとめと今後の課題を提示した。

4. 研究の成果と意義

認知言語学で言う「意味」とは、言語化の対象となる客観的な状況に内在するものではなく、話し手としての人間がその認知能力によって事態をどのように把握し、どう「意味づけ」するかによって生み出されるものであると考える。そして、事態を言語化する際、話し手はいくつかの可能な選択肢の中から一つ選ぶことになるが、事態を捉える視座をどこに設定するか、どの部分を言語化の対象として取り上げ、どの部分を前景化し、どの部分を背景化するかといった話し手の主観的な認知的営みによって行われるわけである。したがって、類義表現である「～始める」「～出す」「～かける」「～てくる」は同じ客観的状況に対しても、それぞれの表現の事態に対する捉え方が違うことになる。

本研究の結論として、「～始める」「～出す」「～かかる・かける」「～てくる」の意味拡張の動機付け、及び意味の本質を明らかにしたが、その骨子は次の通りである。

「～始める」：出来事の単なる時間的內部過程の始まりを表し、内部過程における〈始まり—続き—終わり〉といった全過程をベースにして存在し、終わりへの到達をほのめかす意味特徴がある。

「～出す」：〈容器のスキーマ〉を介して「外部への移動」というところに動機付けられ、ある事態変化の結果の出現を表す客観的な捉え方で、出現した事態の始まりに焦点がある。

「～かける」：事態変化の結果に焦点があり、事態変化の結果に向かう途中を表わす。また、「かかる」から派生する「阻害」の意味に動機付けられ、結果の未達成を潜在的に表す。

「～てくる」：「来る」が表す「自己領域への到達」というところに動機付けられ、ある事態変化の結果が話し手の知覚領域への出現を表す主観的な捉え方である。また、「～てくる」が表す「始動」は話し手が知覚できる変化の結果からの開始を表す。つまり、「～始める」は〈始まり—続き—終わり〉といった出来事の時間的內部過程ベースに始まりの段階を取り立てるが、「～出す」「～かける」「～てくる」などは「～始める」のように事態の〈始まり—続き—終わり〉の内部過程から始まりの部分を取り立てるものではない。さらに、「～出す」「～かける」「～てくる」は事態認識の問題として、話し手は事態を認識するだけで、その事態をコントロールすることを意味するのではない。このため、「～出す」「～かける」「～てくる」は実際に発生した事態を述べることしかなく、意志的表現、否定表現などにはならないというのが本研究の主張である。

以上の認知意味論の手法を採り入れることにより、本研究の意義は以下のようにまとめられた。

第一は、認知言語学理論研究に対する貢献である。従来の類義語に関する研究は言語現象の記述だけを重要視する傾向が多く、なぜそのような違いが現れるのかという側面までは説明できないことが多かった。本研究では「～出す」「～かける」「～てくる」などには本動詞が含意する固有の意味が反映されていると考える。例えば、「～出す」は「外部への移動」、「～てくる」は「自己の領域への到達」を表すが、その根底に存在する意味が外の形式と区別できる重要な手がかりとなる。したがって、本研究は認知言語学におけるスキーマ理論の妥当性を裏付けるものでもある。

第二に、この研究結果を通して、将来の日本語教育では単なる言語現象の記述に留まるのではなく、イメージ・スキーマを通じた体系的な意味での説明が必要になる。また、本研究の成果を足掛かりにして学習者にとってアスペクトにおける事態把握（始動相、継続相、終結相にいたる全体的な流れ）を明確に示すことが期待される。本研究での研究成果は日本語教育にも効果的に適用されると思われる。

5. 審査会における意見

「雨から雪に変わりつつある」などのように、日本語では始動に関する表現が多岐に存在する。それらの弁別的な意味特徴をめぐっては「出す」「始める」「かかる」のそれぞれの個別的研究もふくめてこ

れまでも多くの研究の蓄積がある。そのなかで、本研究は認知意味論的アプローチによる考察によってこれらの複合動詞の意味と機能を明らかにしようとした。副査の田中寛指導教授からは従来の記述研究に加え、これらの複合動詞の概念的な意味特徴を認知というフレームで明らかにしようとした成果を評価した。なお、「雪が融けかけ始める」のような複合的な始動相の様相、さらに「かける」にあっては「写しにかかる」「食ってかかる」のような特徴も指摘された。なお一定の文脈における断続性と連続性についての更なる検証が求められた。外部副査の定延利之教授は全体的な構成の適確性に言及しながら、それぞれの意味特徴の連続性、相関性についてのさらなる分析の必要性があげられた。とりわけ従来の認知言語学の方法論において直観に依拠する結果、あいまいな観察も残されており、心理実験の成果なども取り入れる必要がある。クロアチア語における「てくる」の研究の心理的な要素が大きく作用していることを参考例としてあげられた。プロトタイプ的な意味をどう敷衍するかについても多角的な検証が指摘された。主査の福盛貴弘准教授からは四種の始動相の意味的な特徴を比較的な視点から分析した点を評価する一方、研究の理論的枠組みの首尾一貫性においてやや明晰性に欠ける点があるとしながらも、全体的な論述の整合性を評価した。副査の大月実教授は認知意味論の立場から、始動相の叙述のメカニズムについて継続相、終結相にかかわるアスペクトの全体的な把握に貢献する成果であるとする一方で「出す」「かける」「はじめる」の相互の比較対照をさらにすすめる必要がある点が述べられた。

論旨の記述にやや重複する点、一部用例データの適確性、用語の統一などについて指摘があったものの、いずれも部分的修正にとどまるもので、本論文の全体的質的成果を損なうものではない。

審査は2015年1月29日、大東文化会館にて行われ、各委員の意見整理は主査福盛貴弘がおこない、田中寛指導教授、内部副査、外部副査の確認を経て、ここに上程するものである。

結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

（平成27年2月19日）

以上

添付資料：朴龍徳氏の学術業績(2012.4-2014.10)

刊行年	刊行月	学術論文題目、掲載雑誌 ※はレフリーのある外部学術誌
2013年	5月	※「複合動詞「V かける」の意味拡張 —〈起点—経路—到達点〉スキーマにおける「移動」の視点から—」『日本認知言語学会論文集』第13号、pp.37-49、日本認知言語学会
2013年	2月	「日本語の「～出す」の意味と機能」『語学教育研究論叢』30号、pp.247-263、大東文化大学語学教育研究所
2013年	3月	「日本語の「～出す」と中国語の“～出”の対照研究」『外国語学研究』14号、pp.219-228、大東文化大学大学院外国語学研究科
2013年	3月	「「始動」を表す「～てくる」と本動詞「くる」の関連性」、『指向』10号、pp.125-135、大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻誌
2014年	6月	※「アスペクトの意味を表す「～かける」の認知意味論的アプローチ」『日本語文化研究』第三輯(上)、pp.351-363、中国延边大学出版社
2014年	3月	「現代日本語における始動表現の意味的違い—「～始める」と「～かける」との比較を中心に—」、『外国語学研究』15号、pp.191-200、大東文化大学大学院外国語学研究科
2014年	3月	「「始動」を表す「～始める」と「～出す」の認知意味論的考察による違い」、『外国語学会誌』43号、pp.249-259、大東文化大学外国語学会
2015年	3月(予定)	「認知意味論からみる「～かかる」「～かける」の意味、及びその異同」『語学教育研究論叢』32号 大東文化大学語学教育研究所

2015年	3月(予定)	「現代日本語における始動を表す「～てくる」と「～始める」の意味的違い」、『外国語学研究』16号 大東文化大学大学院外国語学研究科
学会発表	発表日付	発表題目、開催場所など
2012年	6月17日	「複合動詞「V かかる」の意味拡張 —〈起点—経路—到達点〉スキーマにおける「移動」の視点から—」、第四回「東西文化の融合」国際シンポジウム 大東文化会館
2012年	9月8日	「複合動詞「V かかる」の意味拡張 —〈起点—経路—到達点〉スキーマにおける「移動」の視点から—」 第13回日本認知言語学会全国大会、大東文化大学
2013年	8月19日	「アスペクト的意味を表す「～かける」の認知意味論的アプローチ」第三回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、中国延辺大学
2013年	10月27日	「現代日本語における始動表現の意味的違い —「～始める」と「～かける」との比較を中心に —」大東文化大学創立90周年記念第五回「東西文化の融合」国際シンポジウム、大東文化会館
2014年	10月26日	始動相「～かかる」の認知意味論的分析 第六回「東西文化の融合」国際シンポジウム、大東文化会館